マシュー・アーノルドの「詩論」及び「詩歌の研究」

渡　辺　栄太郎

Matthew Arnold's "On Poetry" and "The Study of Poetry"

Eitaro Watanabe

1

1882年から1888年にわたるマシュー・アーノルドの生涯の中で，青年時代に枢密院議長ランズダウン卿の秘書を，その後殆ど晩年まで教育局視学官を勤め，1857年から2期10年の間，彼は母校オックスフォード大学で詩学教授の地位にあった。その間アーノルドの文筆活動は教育関係の報告書から，詩人・文芸批評家としての活動，更に社会評論，政治・哲学・宗教・科学論など当時では類を見ないほど広い範囲に，活躍の対象を広げていた。所で1870年代の末頃，それまで一連の社会・政治批評に没頭してきたアーノルドは，ここで再び文芸批評に立ち戻り，幾つかの詩人論を著した。その中でも詩歌一般について論じた2編の作品は，今日では英文学史上代表的な詩論の古典の一つと見做されている。今回はこの2つの作品について検討し，アーノルドが詩歌についてどのような考えを抱いていたかを験証することにしたい。テキスト原文は［The Complete Prose Works of Matthew Arnold］，Ⅸ，"*English Literature and Irish Politics*", Ann Arbor the University of Michigan Press によるものである。

※　※

19世紀イギリスでは，あらゆる分野の人間の業績について「最も偉大な」(the greatest) という賛辞を冠した人物のコレクションを出版するのが一つの流行であったらしい。ウォレス・ウッド (Dr. Wallace Wood) という人の提案に依る一群の叢書で，アーノルドは "*The Greatest Men*：*Portraits of the One Hundred Greatest Men of History*" (London, 1879–80) に，詩人についての短い 'Introduction'(序説) を書くのを引き受けた。これによって彼は£50の報酬を受けることになったが，当叢書の 'General Introduction' を担当したのは哲学者エマースン (Ralph W. Emerson) であったことが知られている。(1) この時アーノルドの書いた序説に当たるものが，ここに検討する

"On Poetry"（詩論）である。本論は数ページの短い評論であるが，アーノルドの技葉の多い難解な長文の割には明解な論理の展開があるようには思えない。しかしここで論旨をまとめれば，先ず次の４項に収められるであろう。

(1)人間活動のあらゆる分野の中でも，詩人の表明する働きは最も幸せなものである。それは詩歌が際限のない大衆性を持ち，力の源泉を成している事実による。アリストテレスは詩歌を重大な価値あるものとし，ベーコンがこの考えを拡充した。それは人間生活一切の現象を人の心で捕え，より偉大で正確な善へと向かわせ，人間世界に変化をもたらす原動力となるからである。

(2)人間活動の中での詩歌の優越性は歴史よりも高い知恵を有し，知的性質と密接な交信があって他の芸術より上位の価値がある。詩は本来美と接触したアイデア（着想）が，情緒によって高められる性向を持つ。これが我れわれの人間現象について解釈的（interpretative）と感じさせ，満足を与えてくれる。一方で科学は現象解明のために大きな役割りを担うが，着想に着想を加えるばかりで情緒を持たないために，情緒に触れるまで完結しない。

(3)人間現象解明の根拠には哲学と宗教への要求が位置する。哲学は知恵の愛として，人間の持つ高尚で不死の渇望がもたらす組織的思想の構成である。アーノルドは文学者ゲーテとドイツ哲学との関わり，プラトンの哲学と文学との関連を取り挙げて，詩歌の重要性を強調した。

一方，情緒と結びついた道義としての宗教の支配は実に破壊し得ない。しかし宗教の教義も絶対的に揺るぎない存在として有るものではなく，情緒を流動する現実の事実に接着し（attach）たものである。

(4)詩歌はアイデア（発想）が総てであるが，情緒を発想に結びつけ，発想は事実の認識から成るものである。結局宗教の最強の部分は，認識されざる詩歌（unconscious poetry）である。最後に，アーノルドは次のように結んでいる。

'The future of poetry is immense, because in conscious poetry, where it is worthy of its high destinies, our race, as time goes on, will find an ever surer and surer stay.'(2)

「詩歌の未来は広大である。それは意識的な詩の中で，その高尚な運命に値いする所では，時がたつにつれ，我れわれの人種に増すます確実に根付いてくるのが判るであろう。」

以上の４項は多少言葉を補って，内容を解り易く要約敷延したものである。

ここで見るアーノルドの詩歌観について21世紀にも入った現状から考えると，先ず詩の価値と役割りへの期待感が余りにも大き過ぎ，過剰な評価に過ぎるような思いは否めない。この「詩論」が書かれてから既に120余年，英国ばかりでなく，世界各国の社会事情も当時とは大きく様変わりしてしまった。英国詩壇は日本とは比べ物にならない程社会的評価と重要度も大きいものではあるが，それでもアーノルドの言うように，現在，「詩歌が際限のない大衆性を有し，力の源泉を成している」ものであろうか？　今日テレビ・携帯電話・インターネットとマスコミの飛躍的発展から，直接映像・音響として大量の通信が自由に飛び交う時代，詩歌の意味と役割りに変化の起

きない筈はない。それから詩歌の優越性とか時代解釈の意義などにも，当然その影響は大きい。時の経過の中でも詩歌の持つ意味が基本的に変わることはないであろうが，アーノルドの発議は，詩歌そのものの持つ意義を，非常に大きく拡大したものとして理解すべきであろう。

2

1878年の10月末，アーノルドの姪メアリ（Mary）の夫であるハンフリー・ウォード（T. Humphry Ward）は，アーノルドに英詩人のアンソロジーを出版する提案をしてきた。これに対してマシューは，自分が詩人でもあり，学校視学官としての立場から，当初この計画に参加するのを丁重に辞退した。アーノルドは当時ウッド（Wood）の "*The Hundred Greatest Men*" に短い「詩論」（On Poetry）を書いて間もない頃だったのである。しかしアーノルドはウォードが自身の企画を断念するのを心配し，5か月後の79年3月10日に手紙を書いた。'I will not go back from my promise to help you if my aid was seriously wanted, and I will write your Introduction.'(3) こうしてウォードの企画を引き受け，彼は11月には当エッセイの為の準備に入っていた。'I have been reading Chaucer a great deal, the early French poets a great deal, and Burns a great deal. Burns is a beast, with splendid gleams,——'(4) と書いている。1880年2月初めには校正刷りが完了し，5月の半ばに "*The English Poets*" の最初の二巻がマクミラン社により出版された。アーノルドのこの 'Introduction'「序文」はこのエッセイ集の中でも最上の作品とされ，今日では "The Study of Poetry" の題目で彼の最も有名な批評文の一つとなった。しかし当書に発表されたアーノルドの18世紀英詩についての概念には，当初から新聞・雑誌に反対を含めて色いろな物議を醸したことが知られている。(5) またこの作品は1888年刊行の『批評論叢，第二集』 "*Essays in Criticism*, 2nd Series" に改めて収められた。

※　※

この序文 "The Study of Poetry" 冒頭の1文には，先の "On Poetry" に於ける結びの最終部そのものがそっくり使われている。これはアーノルドの詩歌に対する信念と抱負を表わし，本人にも気に入りの文章だったのであろう。それに続く一連の文節も，実は前節の結論の近くで述べられた内容に同一である。(6)

そこで自分たちの詩歌（英詩）の全研究では，その詩歌の流れの川を支配してきた思想を跡付けし，詩歌の高尚な命運に沿う価値高いものに限って考量されなければならないと主張した。そうすることに依って，

'More and more mankind will discover that we have to turn to poetry to interpret life for us, to console us, to sustain us. Without poetry, our science will appear incomplete ; and most of what now passes with us for religion and philosophy will be replaced by poetry.(7)

「増ます以て人類は自分たちがその人生を解釈するために詩歌に向かわなければならないこと

を発見するようになるだろう。詩がなければ，科学は不完全に見える。そして我れわれを宗教や哲学へ今追いやっているものの多くは詩歌に依って置き換えられる。」

この文節にはアーノルドの詩歌への並みなみならぬ期待と気負いが感じられるが，この１節はまた前論 "On Poetry" で解析した本論１の(2)項にあらかた該当するものである。しかしここでは，特に「人生を解釈する」(to interpret life) という言葉に注目したい。これはアーノルドが1857年にオックスフォード大学詩学教授に就任し，最初の就任演説 "On the Modern Element in Literature"（文学の近代的研究）で表明した「時代を解釈する」[8]というギリシァ時代の文学について得た概念を，人生に当て嵌めたもので，以後アーノルドの特徴的な基本的文学理念の１つを成すものである。その上で彼は，ワーズワースが詩を 'the breath and finer spirit of all knowledge'（全知識の息吹きとより洗練された精神）と呼んだ詩の資質を取り上げ，このような高尚な命運を有する健全で，詩的な真実と美とを備えた「人生の批評」[9]こそが詩歌の真の力となると説いたのである。

では最善の詩歌とはどんなものであるか？

'The best poetry is what we want; the best poetry will be found to have a power of forming, sustaining, and delighting us, as nothing else can.'[10]

「最善の詩が我れわれの欲しい物だ。最善の詩は形成し，持続し，我れわれを喜ばせ，他の何物も出来ないようなものである」，として，次のように続けている。それは，より鮮明でより深遠な詩から滲む最上の感覚，詩から引き出せる力と喜びの感覚で人に貴重な利益となるもの，と言うように要約できるであろうか。

所でこれについてアーノルドは，２つの用心すべき注意点を指摘している。それは歴史的評価と個人的評価に於ける過誤の問題である。真実の正しい評価 (real estimate) に対して犯される誤ちとして歴史的評価（historic estimate）の過誤というのは，国家国民の言語，思想，または詩歌の進歩過程で，詩人や時代思潮について，誤って誇張した賞賛をしたり，実際の価値を過小評価したり無視したりしてしまうことである。個人的評価（personal estimate）の誤りは，個人的な好み，類似性，或いは境遇への同情や共感などから，実際の価値から隔った評価見積りをしてしまうことである。これらは非常に陥り易い誤りで，特に国家（風潮）的な，内至習慣的な立場から周囲のものに誤った判断を来たし易いとする。要するに真の古典に値いするものを見出すことの大切さ，そして先入観に捕われず，伝統的評価が必ずしも絶対ではないことを留意するように戒めている。アーノルドは近年フランスの新しい学者・批評家に依る歴史的評価再検討の動きを話題として，その流れにある「ローランの歌」[11] (*Chanson de Roland*) が天才の手になる作品として正当に評価されているものと見た。アーノルドが掲げた一節を次に引用してみる。ローラン (Roland) は致命傷を受け，１本の松の木の下に身を横たえて，顔をスペインと敵方へ向けたとき——

'De plusurs choses à remembrer li prist,

De tantes teres cume li bers cunquist,

De dulce France, des humes de sun lign,

De Carlemagne sun seignor ki l'nurrit.'

彼あまたの記憶を呼び覚ましたり，

勇気が征服せる総ての土地を，

楽しきフランス，また家系の人びとと，

彼を養える君主王シャルマーニュを。(12)

作者アーノルドは，次に古代の古典としてホメロスに眼を転ずる。「イリアス」(Iliad) から3つの部分を引用しているが，簡略のために最も短い1行だけの，アキレスによるプリアムへの言葉を選んでみよう。

Καὶ σέ, γέρον, τὸ πρὶν ἀκούομεν ὄλβιον εἶναι·

いや汝も亦，老人よ，聞くところ，曽ては幸せにてなかりしや。

以上の試訳は，テキスト欄外の英訳 'Nay, and thou too, old man, in former days wast, as we hear, happy.' に基くものである。これらは原初的時代の作品ではあるが，いずれにも否定し得ない賞賛に価する詩的性質を持った部分の例として取り上げている。そこで，——

'Indeed there can be no more useful help for discovering what poetry belongs to the class of the truly exellent, and can therefore do us most good, than to have always in one's mind lines and expressions of the great masters, and to apply them as a touchstone to other poetry.'(13)

「心の中にいつも偉大な巨匠の数行や表現を留め，他の詩へそれらを試金石として適用すること以外に，どんな詩が真に優れた等級に属するかを発見する将にこれ以上有用な助けはなく，それ故我れわれに大きな利益をもたらすものもない。」

これがアーノルドの主張する古典判別法だと言える。彼は続けてダンテ，シェークスピア，ミルトンの例を挙げているので，最小限ここに記してみたい。まずウェルギリウスへ向けたベアトリーチェの愛らしき言葉，

'Io son fatta da Dio, sua mercè, tale,

Che la vostra miseria non mì tange,

Nè fiamma d'esto ìncendio non m'assale...'

「神我れをかく創りしに，慈しみに感謝し

あるべし，汝が悲惨も心にとどかず，

この業火の炎とて我れを照らさず。」

Inferno（地獄編），欄外の英訳を参照の試訳。シェークスピアについては，ハムレットのいまわの時，親友ホレイショへの懇請である。

'If thou didst ever hold me in thy heart,

Absent thee from felicity awhile,

And in this harsh world draw thy breath in pain.

To tell my story…'

「もし汝の心に我れを抱きし居れば,

しばしの間幸せには遠ざからん。

またこの酷き世に苦しみ息引きとらん。

我が物語りを告げんとて……」

ミルトンの引用については，ミルトン的語文の最後の一節として，

'…which cost Ceres all that pain

To seek her through the world.'

「…これぞセレスに総ての苦しみ払わせて

世界にくまなく彼女を求めんとして。」

以上は本文に提示された例文の一部でしかないが，アーノルドはもし才覚があってこの見本を適用できれば，明晰さを保ち詩歌についての判断を健全にし，誤った評価を防いで真実の評価へ導くだろうとしている。言うまでもなくダンテの引用は「神曲」(Divina Commedia) 地獄編から，シェークスピアからは「ハムレット」最後のシーンで，ミルトンからは「失楽園」(Paradise Lost) の場面である。これらの作品は，アーノルドが年来世界の最高古典として認定していた大叙事詩詩人，ホメロス，ダンテ，シェークスピアに，ゲーテを除いてミルトンを加えた作者たちに依る作品の最も感動的部分を採用したものであろう。

3

前節 2 に引用してきた詩文は互いに広く異っているが，総てに共通するものがあるとアーノルドは主張した。それは非常に高度な詩的性質（the very highest poetical quality）だと言い，第一級の巨匠の韻文で初めて認識されるものだとする。

They are in the matter and substance of the poetry, and they are in its manner and style. Both of these, the substance and matter on the one hand, the style and manner on the other, have a mark, an accent, of high beauty, worth, and power.(14)

「それらは詩歌の材料と実質の中にあり，またその様式と文体の中にある。これら双方とも，一方で実質と材料が，他方で文体と様式とが高度な美と価値および力の特色，その強調を持つものである。」

ここに言う抽象的な特色（mark）や強調（accent）とは，詩の材料と実質によって，また詩の作法・様式と文体とに依って与えられると考えている。その上でアーノルドは，アリストテレスが詩歌の，歴史に対する優越性がより高い真実と真摯さに在るとした言説を引いて，

'that the substance and matter of the best poetry acquire their special character from possessing,

in an eminent degree, truth and seriousness.'(15)

「最高の詩歌の実質と材料とは，卓越した程度に真実と真摯さを所有することから，その特別な性質を獲得すること」になると語っている。その上もう一つ付け加えて，その特別な性質とその強調とは，文体と様式に向けて「言い回し」(diction) と「動き」(movement) によって与えられるものだと指摘されている。しかし要するに，これらの要素は相互に関連しているものであり，詩としての卓越性はその混然とした全体への適用の妙に基くものとしているようにみえる。以上はアーノルド自身の制約の上で提案した一般法則であると断っている。言うまでもなく，ヨーロッパ，特に西欧社会には壮大な叙事詩の長い伝統がある。アーノルドが提唱した以上の詩的理念は今日から見れば大いに議論の余地もあろうが，1つ1つの術語を創造して論議を進めるあたり，実にアーノルドらしい手法だという思いがする。

※　※

次にもう一度フランスの初期の詩に戻ることになる。それは12，13世紀，ヨーロッパでの近代言語と文学の種の時代に，フランス詩がその源泉となっていたからである。アーノルドの筆致に従って西ヨーロッパの詩文学発展の略史を顧みればほぼ次のようになる。

12，13世紀南フランスのラングドワ（*langue d'oil*）とラングド（*langue d'oc*）で詩歌が詠まれ，トロバドール（troubadours）に依ってイタリアへ波及し，やがてダンテやペトラルカの古典に結実するが，一方北フランスでは現在のフランス語の原形が出来て，ロマンス詩の開花を迎えた。当時イングランドではアングロ・ノルマン王朝の時代で，漸く英国詩の形成が始まることになる。ダンテの師であったイタリア人ブルネット（Brunetto Latini）はフランス語で "*Treasure*" 「宝物」を書き，同じ13世紀クリスチァン（Christian of Troyes）は騎士道を歌って，フランスにロマンス詩の定着をみせた。14世紀には言葉・リズム・韻律の詩的要素が整い，チョーサーの学んだイタリア詩も，このフランスから基盤を受け入れたものであった。チョーサーに依って初めてイギリスで，詩的重要性が確立することになる。

チョーサー（Geoffrey Chaucer, 1340 ?–1400）といえば無論のこと "*Canterbury Tales*" であるが，アーノルドに依ると，彼の優越性は詩の実質（substance）と文体に在るという。その実質の美点は人間生活への心優しい見方（kindly view of human life）にあり，これが広く自由で，単純明快さの中に表明されていると見る。真実の人間的観点から世間を調査し，高度な人生の批評を有するものと考えた。またチョーサーの表現法（言い回し）には水みずしい流動性，滑らかで易しいリズムを持って「汚れのない英語の泉」(well of English undefiled) となり，世紀を画して伝統を基礎づける英詩の父となった。そのようにして，以前のロマンス詩の韻文にはない様式（作法）と動きの美徳を有すると評価した。

'O martyr souded to virginitee !'

「おゝ殉教者は純潔に同化せり！」

またチョーサーの 'The Prioress's Tale'「女子小修道院長の話」でのユダヤ人社会で殺されたキ

リスト教徒の物語を，ワーズワースが取材して，自分の詩で近代化した例が紹介されている。

続けてアーノルドはチョーサーの難点を次のように指摘した。チョーサーは自由さと流暢さに秀でているが，大古典作者の仲間には入らない。実質（substance）としての詩的真実を有するが，強調（accent）に欠けるとする。

'In la sua volontade è nostra pace...'

—*Paradiso.*

「神の意の中に我れらが平和はあり…」

—天国編。

チョーサーは上の例に見る80年以前のダンテに，手のとどく存在にはなり得ないとする。彼はまだ成長過程にあるイングランド詩人であり，最上のクラスに置かれるには何物かが不足している。それは σπουδαιότης，すなわち高度で優れた真摯さ（seriousness）であって，これがアリストテレスのいう詩の壮大な美徳を成すものだと述べている。これを備えているのはホメロス，ダンテ，シェークスピアなのだという。しかしチョーサーは実質である真実と交流し，文体と様式（作法）に絶妙な美徳があって，ここから英文学での真の詩歌が創出されたと評価している。

※　※

チョーサーは百年戦争に参加したり，宮廷人として働いたりしていたが，1372年と78年の2回国王の命でイタリアに派遣された。当時 Petrarch や Boccaccio が健在で，彼はイタリア詩の影響を大きく受け，作品の形式の新しさや人間社会に対する関心を強く抱くようになった。職務のかたわら幾つかの作品を書いていたが，1387–1400年頃 "*Canturbury Tales*" を執筆し，その間断続的に死ぬまで書き続けた。それには社会と人生についての深い経験と，円熟した心境が伺えるものとなっている。アーノルドが語ったように，今日でも「イギリス詩の父」と称され，中世の束縛を脱して初めて英文学に近代の特質をもたらした詩人である。特に「カンタベリー物語」では，人間性に対する深い関心，温かく余裕ある心境，鋭い観察とユーモアが，自由な表現法と相まって彼の詩的特色をなしていると言われる。これらは大かたアーノルドの批評と一致している。「韻律法も在来の頭韻詩を採らず，フランス風の rhyme 形式を取り入れた功は大きく，さらにロンドンの方言だけで詩作したことは文学的標準語の確立に資する所少なくなかった」(16)と考えられている。

4

アーノルドの時代，ヴィクトリア朝後半の時期にはワーズワースやコールリッジは若い世代に重きを成さず，18世紀とその文学が好まれる傾向があったらしい。しかしアーノルドは従来の歴史的評価と真実の評価とが一致するかどうかが問題だとみて，真の評価の見本にシェークスピア，ミルトンの名を挙げている。ドライデン（John Dryden，1631–1700）は18世紀，スコットランド

調の荒いが自然の美しさを持ち，元気ある優しさに栄光ある特色を有する。しかし彼はむしろ詩歌ではなくて，真実のイギリス散文を象徴する。一方でポープ（Alexander Pope，1688–1744）は高位の僧で，散文と理性の時代の建設者としての詩人であるとした。18世紀の王制復古後には，ピューリタン解放からの流れから，散文の緊急な必要が時代精神の主潮に乗っていたからである。自由な魂は宗教生活の或種の放漫と損傷なくしてはもたらされない。当時の「気まぐれ散文」(a fit prose）への必要は，規則性，同一性，正確と平衡の要求から生じたもので，この時代には詩歌に対して沈黙と抑制を代ってもたらしたのである。以上のような理由から，ドライデンもポープも，散文の古典とはなっても，詩歌の古典とはなっていないと見る。

グレイ（Thomas Gray，1716–71）は当時代の文学の詩的古典に入る。グレイの地位は独特で彼に好意ある時代に来たが，独立した人生の批評に到達した詩人としての力量には欠ける。ギリシァ詩人に学んだ詩的観点と手法を有するが，この手法を時に利用している。彼は最も弱い意味で古典に属するとした。

次に18世紀末，バーンズ（Robert Burns，1759–96）の偉大な名に出会う。彼については個人的評価が流行し始めている。しかし18世紀に戻してみると，僅かの評価しかなかった。

'Mark ruffian Violence, distain'd with crimes,
Rousing elate in these degenerate times；
View unsuspecting Innocence a prey,
As guileful Fraud points out the erring way；
While subtle Litigation's pliant tongue
The life–blood equal sucks of Right and Wrong!'
「暴漢の暴力に気を配れ，罪にけがれて，
立って元気出せこの堕落せる世に。
見よ疑い知らぬ無垢の犠牲を，
偽りの欺瞞誤てる道を指し示す如く。
微妙なる訴訟曲げ易い言葉であれば，
等しき生命の血は正も邪も飲み込むよ！」

これは明らかに真実のバーンズではなく，真のバーンズはスコットランド詩にある。スコット人の評価は多く個人的になり易い。スコッチドリンク，スコッチ宗教，スコッチ作法はしばしば荒っぽくて浅ましく，反発的な世界であるのに。彼は人を喜ばす力があるが，乱痴気さわぎ詩に真摯さの強調がなく不健全だ。しかしバーンズの賛美者たちは，バーンズは偉大な詩人で人間の独立，平等，威厳を詩に託したと主張する。そして，

'To make a happy fire–side clime
To weens and wife,
That's the true pathos and sublime

Of human life.'

「幸せな炉辺(ろべり)の風土を作ること

これ幼児(おさなご)や妻のため，

これまさに人のひとたる生活の

まことなる悲哀と高貴。」

賛美者たちはここに，他者の追随許さぬ人生の批評があると言うだろう。成る程ことば使いの練達者の手になる作で，発想（idea）の人生への巧みな適用がある。しかしアーノルドは最高の詩的成功には，高度な真摯さ（high seriousness），絶対的な誠実さから来る高尚な真面目さの強調がなければならないとし，ダンテの 'In la sua volontade è nostra pace...' という先述の句を引き合いに出してバーンズ本心の魂の深みから出たものではなく，多少とも説教していると判断した。従ってバーンズは大きく自由で，つり合い，優しさから悲哀感もあるが，チョーサーの手法の流暢さの代わりに飛躍する機敏さに美点を見出した。しかし大古典の持つべき高度な真摯さに欠け，材料と手法（matter and manner）の美徳を持たないとした。

続けてアーノルドはバーンズの個々の作品にスペースを割いて言及している。'The Jolly Beggers' は特上の詩的成功を収めたとしながら，才気が勝ってむさ苦しさと獣性が目立つ。'Duncan Gray', 'Tam Glen', 'O Whistle and I'll come to you, my Lad', 'Auld Lang Syne' などでは自由と茶目っ気，機知の他に，無限の悲哀が加わってそれこそ真正のバーンズを表わし，真実の評価を高くしている。

'We all of us have a leaning towards the pathetic, and may be inclined perhaps to prize Burns most for his touches of piercing, sometimes almost intolerable, pathos ; for verse like——'[17]

'We twa hae paidl't i' the burn

From mornin' sun till dine ;

But seas between us braid hae roar'd

Sin auld lang syne...'

「我れわれ誰もが感傷的になる傾きがあって，次のような詩に対しては，彼の突き刺すような，時としては殆ど耐えられない悲哀の筆致に，バーンズを激賞する傾向が恐らくあるのだろう——」

「我れら２人小川で水を掛け合って

朝日の出る時から夕餉(ゆうげ)どきまで。

されど我れら隔だつ海はどよめいていた

あゝ遙かなり昔の日々よ……」

ここ（日本で歌われる「蛍の光」の原詩本文）ではバーンズが健全であるだけ美しい，とアーノルドは褒(ほ)めている。一方でシェリー（Percy Bysshe Shelley）の個人的評価に誤導された支持者にとっては，バーンズの言葉とイメージの多彩色の霞は，

'Pinnacled dim in the intense inane'——

「激しき虚ろに高くかすみて」——

と映ることもある。しかし「最もいたずらっぽく健全な時にあるバーンズとの接触ほど，より健康的である接触は有り得ない」[18]とアーノルドは評価している。

Byron, Shelley それに Wordsworth ら，自分たちの世代に近い詩人の詩には，その評価はどうしても情熱を伴った評価となり易い。言わば主観的好みが幅をきかすということであろう。それら詩人についての「真実の評価」(real estimate) には，偉大な古典詩を一種の試金石として用いることをアーノルドは提案してきたのである。また彼は，19世紀後半現在，当時の著名な詩人・詩歌集に対して検討の好い機会を与えてくれる，そのために以上の方法を披露してきたと述べているのである。

詩歌に於ける真実の古典を読む作業によって，我れわれは最善のものを感じ，深く味わい，楽しむことができるという利益が得られる。世上多数の読書本が出回るようになり，有用で優れた文学を行き渡らせるという仕事が必要な時代になっている。しかしまた文学の表面上の流行の如何に拘らず，最上の値打ちある文学の支配権は確立されるだろうと，アーノルドは期待を表わした。

'Currency and supremacy are insured to it, not indeed by the world's deliberate and conscious choice, but by something far deeper,——by the instinct of self-preservation in humanity.'[19]

「流通と支配権とはそれに向けて確保される。実に世間の熟慮した意識的選択によるのではなく，遙かに深い何物か，——人間性の中にある自己保存の本能に依るのである。」

これが『詩歌の研究』最終の結びとなった。

5

元来アーノルドは，(ヨーロッパ) 世界の代表的古典として「イーリアス」・「オデュッセア」のホメロス，「神曲」のダンテ，それにシェークスピアと「ファウスト」のゲーテを挙げていた。それでこの「詩歌の研究」ではゲーテに代えて「失楽園」の英詩人ミルトンを入れ，これらの詩人の名句を試金石として「真実の古典」に価するものを識別しようとする試みを語ったものである。その上で，古典の具有する要件を分析して「材料と実質」(matter and substance)，「様式と文体」(manner and style)，それに「強調」(accent) などという用語を編み出し，これを各詩人に当て嵌めて検討するという方法をとった。主に対象となった詩人はチョーサーに始まり，17，18世紀のドライデンとポップ，トーマス・グレイ，最後に相当詳細に言及したのがロバート・バーンズである。今日バーンズはスコットランドを代表する叙情詩人として揺るぎない地位を英文学史上に占めるが，当時19世紀後半，イギリスではかなりの人気があったことを偲ばせる。他に幾人もの詩人をも取り上げて検討したら良かったとも思われるが，アーノルドは 'Wordsworth' のほかに

も 'Thomas Gray', 'John Keats', 'Byron' など，個別に詩人の批評をしているので，これで収めたものと思われる。また晩年，'Milton' と 'Shelley' のエッセイも出版された。しかしこの「詩歌の研究」によって19世紀後半なかばのイギリス詩壇の一面がかいま見られるような趣きもあり，先述したように，この評論は英文学詩論の古典の一つとして認められているものである。最後に，英米の著名な批評家や学者による当エッセイに関連した幾つかの発言を原文のまゝに載せ，簡略のために簡単な敷延と感懐を述べて終えることにしたい。

まずアーノルド専門の研究家としてよく知られるケネス・アロットは，冒頭の文にある詩の「高度な運命」とか「高度な使用」という用語について，

The 'higher uses' and 'higher destinies' Arnold assigns to poetry come from this fact：'More and more mankind will discover that we have to turn to poetry to interpret life for us, to console us, to sustain us. Without poetry, our science——[20]

最初出てきた時に戸惑う言葉であるが，ここではっきりと，「人生を解釈し，慰め，我れわれを支えるものだ」と指摘している。これは将に納得のゆく指摘だと言える。

Nevertheless, in the essay on *The Study of Poetry* he suggests that poetry may come to replace religion in interpreting life for us, consoling and sustaining.[21] ("*Arnold the Poet*", by H. C. Duffin)

The theme of "The Study of Poetry" is that poetry will, as things are going, eventually take the place of religion. Never, perhaps, has such a tremendous burden been placed on secular poetry[22]: ("*Matthew Arnold*", by Lionel Trilling)

以上２つの論説でみると，この「詩歌の研究」の主題は詩が宗教にとって代わるということであり，特にアメリカの有名な評論家ライオネル・トリリングは，「世俗的な詩にこんな途方もない重荷が課されたことはかつてない」と言って，筆者が本論第２節で述べた感懐と同一なことを述べている。また一方，

One rarely finds a poet who is articulate about the secrets of his craft；——(omitted)——his atterances dealing with that craft cannot but command the deepest interest and attention. Such an atterance is *The Study of Poetry*,[23]... ("*The Touchstones of Matthew Arnold*, John S. Eells, Jr.)

自分の技巧の秘密をはっきりと述べる詩人は滅多にないし，そうした事を敢えてする時にはこの「詩歌の研究」のように，詩人の心の最奥の興味や気に留める事柄を統括せずにはいられない，と言って，むしろこれが自然だと見ている学者もいる。更にもう１つ，——

That a work should include "religion and poetry" anticipates his liturgical anthology of Western verse in "The Study of Poetry" and such a work as *Literature and Dogma*.[24]——("*Matthew Arnold, A Life*", by Park Honan)

筆者が1984年に北イングランドのリーズ大学を訪れて会見したホーナン教授の発言であるが，彼はアーノルドがスケーターのように右足と左足にそれぞれ道義的軸足と審美的軸足を置いていたと言っている。アーノルドは詩が宗教にとって代わることは望んでいなかったが，宗教の持つ

最善の洞察は詩の中に在ると考えていたのである。そこで「「宗教と詩」を含むような作品は，『詩歌の研究』での西洋詩の儀式的アンソロジーと更に「文学と教義」('Literature and Dogma') というような作品を予想させるのだ」と語っているのである。つまりアーノルドは一方に詩歌を，また一方に宗教や哲学の2足の草鞋(わらじ)を履いていたという事実を表わしている。

[註]

(1) "*Matthew Arnold*；*IX, English Literature and Irish Politics*", Edited by R. H. Super：Ann Arbor, the University of Michigan Press. p.347.
(2) Ibid., p.63, l.34.
(3) Ibid., p.378, l.34.
(4) Ibid., p.379, l.11.
(5) *Cf.*, Ibid., p.380.
(6) 本論第1節の（3），（4）の論旨を繰り返した内容に一致する。
(7) "*Matthew Arnold*；*IX, English Literature and Irish Politics*". p.161, l.24.
(8) *Cf.*,『マシュー・アーノルド研究』(第1巻)，渡辺栄太郎；文化書房博文社。p.96, l.12-l.18.
(9) 'a criticism of life'，詩を究極的に見て「人生の批評」と呼んだのは，オックスフォード大学での講義'Joubert'（ジョセフ・ジュベール）に於てで，後『批評論叢』(第1集）に収録された。*Cf.*『マシュー・アーノルド研究』(第1巻)。
(10) "*M. A.*；*IX English Literature and Irish Politics*", p.163, l.12.
(11) 中世フランス最古の武勲詩で作者不明。11世紀末の作とされ，回教徒討伐のため，スペインへ遠征したローランの悲壮な戦死を物語る。
(12) "*M. A.*；*IX*", (Text Book). p.167所載の英訳をもとに試訳したもの。
(13) "*M. A.*；*IX*", (Text Book). p.168, l.12.
(14) Ibid., p.171, l.4.
(15) Ibid., p.171, l.19.
(16) *Cf.*『英米文学辞典』(第三版)，研究社。p.224.
(17) "*M. A.*；*IX*," (Text Book). p.186, l.33.
(18) 'no contact can be wholesomer than the contact with Burns at his archest and soundest.' *Cf.* "*M. A.*；*IX*", p.187, l.10.
(19) "*M. A.*；*IX*", (Text Book). p.188, l.20.
(20) "*Matthew Arnold*". Edited by Kenneth Allott, (Writers and their Background). London, G. Bell & Sons. p.141, l.23.
(21) "*Arnold the Poet*", by Charles Duffin. Bowes & Bowes, London. p.144, l.2.
(22) "*Matthew Arnold*", by Lionel Trilling. Meridian Books, The World Publishing Company. p.340, l.32.
(23) "*The Touchstones of Matthew Arnold*", by John S. Eells, Jr. College and University Press, New Haven, Connecticut. p.14, l.12.
(24) "*Matthew Arnold, A Life*", by Park Honan. McGraw Hill Company. p.273, l.30.

——(Sept. 24, 2002)